

---

## 第七章 一九六〇年代の「レスビアン・バー」

↳ Nさんのインタビュより↳

まとめ・杉浦郁子

---

レスビアンのための集会的な活動が見られるようになったのは、一九七〇年頃からである。それ以前のことはあまり調べられていないが、清岡純子『女と女——レスビアンの世界』（一九六八）には、一九六〇年代後半の東京に少なからぬ「レスビアン・バー」が存在していたことが、次のように綴られている。

　　ゲイ・バーがあるように、レスビアン・バーも最近は各地に大分増えてきた。スナックもできている。東京の主なバーには、「ドンジュアン」|| 赤坂、六本木、「芽女(メメ)」|| 六本木、「渋谷」、「魅了(みりよう)」|| 六本木、「白川」|| 銀座、「ヅカ」|| 新宿、「お嬢」|| 四谷、「秘密」|| 四谷、「華芽(かが)」|| 浅草、「スフィンクス」|| 浅草、「美城」|| 浅草、「五郎」|| 上野、「夢の島」|| 上野、など、十四、五店がある。大阪には老舗の「ドンジュアン」はじめ「クロンボ」「潮」「サテン・ドオール」など五、六店。京都、名古屋にもぼつぼつ増えているようであり、やがて全国的に流行していくことであろう。(清岡 一九六八…一一一—一二)

こうしたバーが、寺山修司の率いた劇団「天井桟敷」による「レズ」をモチーフと男装劇（「星の王子さま」一九六八）に協賛として名を連ねていた、という別の記録もあり、その数は二十三軒に上ったという（芝一九九三：二九〇―一）。

当時の「レズ（ス）・バー」は、男装をした女性がバーテンやボーイ、ホストをし、一般の女性客や男性客にサービスをする店であった（清岡一九六八：一一三）。一九七〇年代後半には、すでに下火になっていった（芝一九九七：一一一）とのことだから、この形式の「レズ・バー」に勢いがあったのは、六〇年代後半からの十年間ほどだったのかもしれない。

なぜこの時期にこの形式のバーが生まれたのか。男装の女性たちはなぜバーに職を求めたのか。その後の人生はどのようなものだったのか。こうしたバーはそこに集った人々や社会一般にどのような受け止められていたのか。当時のサブカルチャーのなかでどのような位置づけを獲得していたのか。そして七〇年代後半、なぜどのようにして閉じられていったのか。疑問は尽きない。本格的な調査はこれからであるが、七〇年代前半に「レズ・バー」に通ったことがあるというNさんに、当時のお店の様子を伺うことができた。（杉浦郁子）

## Nさんの話

私が行ったことのあるお店は、まず「芽女」。でも「芽女」は一回しか行ったことがありません。「青い部屋」には何回も行きました。これは最初、青山ではなく、渋谷にありました。渋谷のお

店は、片側がカウンター、反対側がボックスになっていました。モジリアニの絵画（女性像）が飾られていたのをよく憶えています。そこに私が行ったのは、高校生の頃、十六歳ぐらいでした（一九七〇年頃）。

「青い部屋」には「天井桟敷」でできた友達に連れて行ってもらいました。事務所に行くといろいろな人がいて、その人たちの話を聞いたり、遊んだりするのがすごく楽しかった。「青い部屋」は「天井桟敷」から歩いて十分もかかりませんでした。

私は「青い部屋」の雰囲気が好きで、その後も度々一人で遊びに行っていました。その人たちは夜の十一時になると「あなたはまだ十代だから、帰らなきゃいけない」と言っ、車に乗せて、送り出してくれる。そういう心根のある人たちでした。個人的に親しくなった人もいました。BちゃんとYちゃんという人がいて、一度、家に遊びに行っ、ことがあります。そのときも二人は男装をしていました。それが彼女たちの自然なんでしょうね。

「ドンジュアン」にも行っ、ことがありますね。地下に入っ、と、中央に踊るフロアがあり、まわりにお客様が座れるようになっていました。その頃、私が行っ、たお店は、どこも上品で瀟洒、独自の雰囲気がありました。

六本木の「サロン・ド・ピケ」というお店には年中、行っ、ていました。そこもマスターが男装をしていて、奥さんもちやんとしました。お店には、ホステスさんもいれば、男装の人もいました。客層は、年齢層が高く、男性のほうが多かつ、たように思います。マスターのAさんは会話の上手な器の大きい人で、Aさんとの会話を楽しみに来る男性も多くいました。

銀座で十一時まで飲み、お店のホステスさんたちと大勢で六本木の「サロン・ド・ピケ」に繰

り出し、明け方まで、というパターンが多かったですね。「サロン・ド・ピケ」には最初、銀座のホステスさんの紹介で行きました。そういう人たちは、自分のお店とちよつと違った雰囲気求めていたんじゃないかしら。それに、ホステスさん自身、今度は接待されたいわけですよ。私の場合は、ただ単に銀座の後にいくラインナップの一つですね。たまたまそこにAさんという男装をした経営者がいただけの話なのね。だから、男装を目当てに行くわけじゃないんです。

マスターの人間性と上品なお店の雰囲気が好きだったんですね。そこもやはり中央に踊れるフロアがありました。フロアの周りにふわっとしたソファがあって、そこでフロアを見ていたり、ホステスさんが来たり、ダンスの子が来たり、お友達とワーツと盛り上がって踊ったり、マスターと話をしたり。たわいもない話ですよ。ボトルを入れて、みんなと騒いで、一人二、三万はしたでしょうね。

私は、男装のお店よりも、女性のいるバーやクラブのほうが好きだったの。だから銀座のほうによく行っていました。週に二回は銀座に行つてたと思います。お酒を飲むというよりは、雰囲気があつて女性と会話を楽しめるお店が好きなわけですよ。敢えて男装をしているお店に行つたわけではなかったけど、「サロン・ド・ピケ」は大のお気に入りでした。

でも残念なことに、六本木の「サロン・ド・ピケ」は名前を変えて銀座に移転したんです。規模も小さくなり、雰囲気も以前のお店とは全く違い……。そんなこともあり徐々に足が遠のいていったんですね。しばらくしてそのお店に行つてみましたが、もうお店はありませんでした。ちよつと寂しかったですね。マスターだったAさんがその後どうしているのか、私には全くわかりません。

その頃おつき合っていた女性とですか？ 彼女と遊びの場へ一緒に行くことはまずありませんでした。二十歳そここの頃で、怖い者知らずの何者でもなかったんでしようね。今考えてみればよく行つてたなと思いますね。

二〇〇八年四月一日 上野にて

## 文献

- 清岡純子（一九六八）『女と女——レスビアンの世界』浪速書房
- 芝風美子（一九九三）「エッセイ 六〇年代レズビアンブーム——あの頃、レズはオツシヤレ——だつた」柿沼瑛子・栗原知代編著『耽美小説・ゲイ文学ブックガイド』白夜書房、二九〇—二九一
- 芝風美子（一九九七）「眠れぬ夜のために 第一回 がんばれ！ レディス・バー」『anise』五号（一九九七年七月号）、一一〇—一一一